

健康文化

凄いタイトルの本が凄かったというお話

加納 裕士

放射線科入局と読書熱の再燃

読書に関して私がときおり思い出す風景がある。少年時代から私が本の虫であることは紛う事なき事実ではあったが、研修医時代から5年間の医師としてのスタートダッシュの日々（この頃は名古屋大学第一外科に所属）はあまりにも厳しく、生活や気持ちに余裕がほぼ持てず、医学書、雑誌、漫画をのぞけば本を全く読まない時期であった。そんな状態が続いていた頃、それは外科から放射線科に転科してまもなくの時期であったが、とある医局の催しで某飲食店に医局員が集まる機会があった。そこで、私はある先生が右手に一冊の書籍を握っているのを発見した。タイトルなどは忘れてしまったが、歴史小説とおぼしき本であったと思う。このとき、自分自身の中に衝撃が走った。それは、あれほどかつて耽っていた読書という行動が自分自身の中で全く忘れ去られているという事実気づいたからだ。以後、読書熱が再燃することとなり、ペースはともかく、とにかく片時も読書が途切れることが無く今に至る。そして最近ではペースも早まり、漫画、サブカル、小説、ノンフィクション、自己啓発書等々、乱読の傾向はますます進むこととなっている。

小説だけでも年間50冊以上の読書体験の中で、面白くて夢中になる作品は多いが、本当に紛う事なき傑作と感じられる作品は少ない。現実をしばし忘れさせてくれる時間を与えてくれるならそれで読書の役割としては十分とも言えるが、真の傑作への出会いは物語への感動とは別次元の「出会いとしての感動」という最高峰の体験をもたらしてくれる。今回はそんな作品のなかで、われわれ名古屋大学に籍を置く者に若干の縁ある一冊をご紹介させていただきたい。それは増田俊也著「木村政彦はなぜ力道山を殺さなかったのか」という一冊である。

書籍「木村政彦はなぜ力道山を殺さなかったのか」

この書籍は2011年に新潮社から刊行された、上下二段組みで700ページという見た目にも辞書サイズの超重量級の一冊である。なによりのつけからタイトルが強烈である。値段も一般書としては2600円とそれなりに高価だ。自分は特別格闘技ファンという立場でもなく、普段なら格闘技好きのためのジャンル本

だと思い、手に取ることも無かったであろう。しかし発刊されてしばらく経った頃、ツイッターでこの本に関する話題が本好きの間で盛り上がっていくのを眺めていて次第に興味を湧いてきた。書店で実物を見たときにはその分厚さに一瞬怯んだものの、結局購入しその日から読み始めることとなった。そして、この読書はこの五年のうちでもベスト3に入る貴重な読書体験となる。

木村政彦というヒーロー

大先輩の先生方はともかく、多くの方は木村政彦という男をご存じ無いだろう。木村政彦、彼は「木村の前に木村なし、木村の後に木村なし」と言われ、柔道界において15年不敗、13年連続日本一、天覧試合制覇を成し遂げた、戦前から戦後にかけての柔道界に君臨した絶対王者である。別名「鬼の木村」。

彼は大正6年、熊本県に生れる。生家は貧しく、幼くして川砂利取りという重労働の人足として働くこととなる。後の彼の足腰の強靱さの源となる経緯ではあるが、その様な境遇を馬鹿にされた彼は強くなりた一心で町道場に通り柔術を習うようになる。めきめきと頭角を現した彼の名は、やがて地元では知らないものがないこととなる。そんな、彼の転機が訪れるのは拓殖大学柔道部師範、牛島熊辰との出会いである。この牛、熊、辰という3つの獣を名前の中にもつ師範は、彼自身類い希なる才能と資質をもった著名な武闘家でもあった。(ちなみに太平洋戦争をとめるために東条英機を暗殺しようとさえする行動派である。)牛島の目的は彼のもてるものを全て受け継ぎ、彼を超える後継者の育成である。そのため、木村の噂を聞き、彼ははるばる東京から熊本まで出向き、木村を預かるため一家を説得することとなる。

そして、鬼師範牛島の指導の下、木村は過酷な練習を貫き、戦前戦後における柔道界の大ヒーロー、国民的大スターとなる。

この書籍は師匠牛島と弟子木村の壮絶な関係性とそれぞれの生き様を詳しく描いているが、そのストイックな姿勢にはあの時代という背景を前提にしても驚嘆せざるを得ない。

「柔道」とはなにか

さて、ここで言う柔道は現在我々が目にする「柔道」とは若干定義が異なる。戦前、柔道(柔術)には100以上の流派があった。このうち嘉納治五郎が創設した嘉納流柔術、すなわち講道館柔道が現在我々が目にする「柔道」であるが、そもそも講道館柔道も数多ある柔術の中の単なる一つの流派でしかなかった。講道館に対抗する勢力として、京都武徳殿を本山とする武徳会柔道、旧制高校

や帝大などで闘われる高専柔道が有力であった。

本来柔術とは、戦場で刀などが尽きたあとに、素手同士で闘うための技術である。そこでの勝敗は、相手が戦闘意欲を失くし「参った」をするか、いわゆる「落ちる」ことで決着する。仮に戦場での実戦なら、勝負決着の後に折れたり刃欠けした切れない刀で首を取るのである。本来その様な DNA を持つ競技である以上、立ち技で相手を投げることはあくまでも決着へ至るための一つの手段でしかなく、ほとんどの場合、最終的には寝技で勝負が決する。寝技というものは「強いものが圧倒的に有利」という番狂わせの少ない戦い方である。そして、武徳会柔道、高専柔道はこの柔術 DNA の直系に属する流派であり、真の命のやりとりにもっとも近い武術としての流派たちなのである。一方で講道館柔道は、投げ技での一本という様な、必ずしも相手に最終的なダメージを与え切れていない形でも勝負が決する。ある意味柔術としては不完全な血統とも言えるのだ。

それでは、そのような講道館柔道がなぜ現在一人勝ちの様な状況で隆盛したのか。それは戦後における社会状況が大きく影響している。GHQ による占領下において、日本古来の伝統に起因する価値観や文化は大きく規制、制限されることとなり、古来からの戦闘術でもある柔術は基本的に禁止という方向であった。しかしこの様な状況下、嘉納治五郎は積極的に GHQ の将校などを講道館に招き、稽古をつけ、「柔道」への理解を深めさせる。彼らを「柔道」愛好家へと育てることにより味方として取り込んでいく努力を続ける。「柔道」はあくまでも健全な「スポーツ」であるとアピールすることで講道館柔道を守ろうとしたのである。つまり、やや意地悪な言い方をすれば本質を骨抜きにしても武道からスポーツへと柔術を「柔道」へと変化させ、講道館の生き残りを謀ったのである。そして今では我々は講道館柔道のみを「柔道」として認識し、オリンピックなどで熱中することになるのである。この様な講道館柔道の経緯を知れば、「柔道」が武道かスポーツかという議論はすでに講道館自体が遙か昔に回答していることが自明なのだ。いまさら、「最近の柔道は武道としての精神性が欠けている」という類の発言が如何にナンセンスなものかも容易に理解できよう。

では本来の DNA をもつ柔術は廃れてしまったのか。実は高専柔道は今でも、名古屋大学を含む旧七帝大で戦われる七大戦における柔道競技で細々と歴史が重ねられている。(ちなみに七大戦そのものが七帝大柔道大会から発祥している)しかし、柔道エリートでもない旧帝大の学生柔道大会が全国的に取り上げられることなど残念ながらほとんどない。また同時に、七大戦では今でも高専柔道ルールで戦われていることを知っているものもほとんどいない。本来の武

術としてのDNAをもつ柔術は存在だけでなく、記憶の面でも20世紀の終わりにはほとんど風前の灯火だったのである。

しかし、我々は突然に、それも21世紀を迎えた後に、もはや瀕死の状況にあると思われていた本来の柔術をなんとも華やかで衝撃的な形で実は目の当たりにはしていたのである。しかも「世界最強」というキャッチフレーズとともにである。それがヒクソン・グレイシーを筆頭にするブラジルのグレイシー一族が展開した「グレイシー柔術（ブラジリアン柔術）」である。グレイシー柔術は格闘技ブームが吹き荒れる2000年代初頭の日本で一大ブームとなり、その後その圧倒的な強さで世界を震撼させた。このグレイシー柔術こそ、武徳会、高専柔道で生まれ発展した柔術がブラジルに伝わった後、それをもとにヒクソンら兄弟の父親でもあるエリオ・グレイシーが築きあげた柔術なのである。

創始者であるエリオは小柄ながら自身の現役時代には無敵かつ最強の柔術家としてブラジルでは有名であった。木村はブラジルへの遠征時にエリオと戦っている。このときブラジル大統領を含む3万人の観客の前で木村はエリオの腕を取り、彼を失神させ勝者となる。以来、グレイシー一族にとって木村は最も尊敬すべき格闘家となったのである。

木村政彦と力道山

そのような柔道界のレジェンドである木村も、興業としての柔道（この頃には柔道のプロ興業があった）の限界を感じていた。そこで、断腸の思いで当時隆盛を誇っていた力道山を中心とするプロレス界へと活躍の舞台を移していく。力道山は言うまでもなく、太平洋戦争後、敗戦に打ちひしがれる日本人の前に登場した国民的英雄であるプロレスラーだ。しかし、彼は力士としては最高位でも西の関脇であり、木村からすれば格下に過ぎない。しかし、すでにプロレス界の大英雄である力道山の前では噛ませ犬や引き立て役としての役割に甘んじるしかない。木村の忸怩たる思いは想像するに難くない。「真剣勝負なら負けない」木村はやがて、力道山との直接のガチンコ対決を望むようになる。そして、そんな木村の思いを汲み取るように、世間の気運も直接対決を煽るようになる。そして、とうとう運命の直接対決が組まれることとなるのだ。「真剣勝負なら木村の勝ち、ショーなら力道山の勝ち」という専門家の見立てのなか、勝負は思わぬ結果となる。なんと、木村が無惨にも圧倒的な形で敗北するのである。血塗れの惨めな姿でマットに沈むのである。そして、この敗戦が日本格闘界の最大のミステリーとして語り続けられることになるのだ。この書籍「木村政彦はなぜ力道山を殺さなかったのか」は、その最大のミステリーの解

読にも挑戦しているのである。

木村政彦の人生を軸に、柔道史、格闘技史、そして戦前から戦後にかけての政治史を描ききった本作は、その圧倒的な情報量、視点の多様さ、エンタテイメントとしての面白さが同居した怪作である。まさに未知の世界に出会える、貴重な一冊である。格闘界から見た近代史という側面も味わい深い。

興味ある方は是非ご一読されることをオススメする。

補足1：名古屋大学柔道部師範は元第一外科教授、元愛知県がんセンター総長の二村雄次先生で、今春に会食した際、この話題で大いに盛り上がった。その際、すでにこの本を推薦させていただき、読了されていた名古屋大学相撲部師範も同席されていたのであるが、その流れで2014 七大戦の相撲競技の応援に夏の京都まで出かけることとなった。そして、その会場がまさに武徳殿であった。(ちなみに七帝大相撲連盟会長は同門の加藤克彦先生の御尊父であり、元名古屋大学総長の加藤延夫先生である。)

補足2：著者の増田俊也氏は名古屋出身で、旭が丘高校から北大柔道部に入学した。あえて、北大入学と表記しないのは彼への敬意である。年齢は私より4つ上であるが、浪人、留年などのため彼の大学生活は私の大学生活の時期とかなりだぶる。彼自身の北大柔道部時代を描いた私小説的作品「七帝柔道記」もまた素晴らしい青春小説である。私と同じ世代でこの様な大学生活を過ごしていたのかと思うとただただ驚愕するばかりである。「木村～」と一緒に読まれるとまた一層感慨が深くなることは間違いなく、重ねてオススメする。

補足3：増田俊也氏を知ったのは、10年ほど前に彼のデビュー作である小説「シャトゥーン 罨の森」を読んだ時である。これは悪魔の様な巨大罨が登場するパニック小説であるが、その描写がかなり写実的であり、衝撃的であった。友人の第二外科ドクターは私から勧められたところ漫画化されていることを知り、大学病院当直室で漫画版を読んでいたそう。そして、読み終わった漫画はそのまま外科当直室に置きっぱなしにしたところ、その後に当直した第一外科から「あんな怖い漫画を置いていった奴は誰だ。おかげで眠れなくなった」というクレームが来たとのこと。名古屋大学病院外科当直の活動に若干の支障を来す原因を作ったことに関してお詫びする。

(セントメディカル・アソシエイツ LLC)